

第2回生命の海科学館見直し検討委員会記録

日時	平成20年7月17日(木)午後6時00分～午後7時58分
場所	情報ネットワークセンター メディアホール
議題	(1) 生命の海科学館について(協議) (2) 施設の存続見直し又は廃止について(協議) (3) その他
出席委員	(10名) 伴 捷文(議会代表者:蒲郡市議会議員) 松本 昌成(議会代表者:蒲郡市議会議員) 小沢 慎治(情報技術分野市内有識者:愛知工科大学教授) 遠山 憲章(観光分野市内有識者:蒲郡市観光協会専務理事) 伊奈 義兼(地元産業・経済分野市内有識者:蒲郡商工会議所副会頭) 岡本 俊一(市民代表者:公募市民) 長田 広子(市民代表者:女性代表) 牧 信男(市民代表者:地域代表) 小林 憲三(行政代表者:企画部長) 小笠原久和(行政代表者:生命の海科学館館長)
欠席委員	(2名) 鈴木 英文(教育分野市内有識者:蒲郡市教育委員長) 永田 武満(市民代表者:公募市民)
事務局出席者	4名
一般傍聴	6名

議事

[開会 午後 6 時 0 0 分]

開会

〔 議題に先立ち、第 1 回検討委員会で委員から質問のあった施設設置時の目標数値及び施設の民間への一部貸し出しについて、事務局から報告 〕

情報ネットワークセンター長

- ・施設設置時の目標数値（資料 1、2）

資料 1 について（概略）

上段に予算、下段に決算の対比したものが載せてある。構造上・運営上、センター部分と科学館部分というのは溶け込んだ形になっており、財務上でもセンターと科学館は一体となっている。特に歳出部分は分離しがたい為、このようにセンター部分、科学館部分を合計したものが載せてある。

ただし、平成 19 年の決算見込だけは按分という形となるが、概算額を分けて載せた。

当初予算の推移（上段の表）は、 がセンター分・科学館分の合計額。 はその内数で人件費。 はその人件費を除いたもの。 、 は歳入で、歳入については比較的分離がしやすいため、 センター関連の歳入、 科学館関連の歳入。 は歳出から歳入分を引いた運営経費である。

平成 12 年度の当初予算では、科学館の入場料収入が 9 千万円。内訳として一人当たり平均額 600 円 × 15 万人を予定していた。当初予算の運営経費、市からの持ち出し分は 1 億 9,723 万 1,000 円、約 2 億円である。

これに対し、決算（下段の表）では については若干少なめの 2 億 6,700 万円、科学館収入が 1,492 万 3,200 円というものであった。この科学館収入は対予算額の 17% であった。

科学館の入場者数についても当初見込み 15 万人が、決算では 4 万 1,297 人。予算数値に対して 28% であり大変厳しい数値であった。

結果、予算額では 2 億円の持ち出しであったものが、2 億 5 千万円の持ち出しになってしまった。その主たる原因は、入場料収入が非常に少なく対予算で 7,500 万円の減であったことにある。

運営改善に当たっては、科学館は市民にとって無料施設であり、また 1 階部分のパソコン無料体験コーナーは、全入場者にとって無料施設であることなど、構造的に入場者増が収入に直接結びつきにくい体質であることから、歳入よりも歳出を中心とした 運営経費の削減を図ることにより運営の改善を目指した。

平成 12 年度と平成 19 年度の運営経費を比較して約 1 億 2,500 万円のスリム化を行ったが、その内訳が右表である。これには減額要因と増額要因があるが、減額要因は夜の科学館を閉鎖したことによる減額が約 500 万円、電気料の節減 750 万円、マ

リンスタッフ配置の見直しによる減額400万円、人件費の充当先適正化5,150万円（直接のスリム化対策ではない）、通信運搬費の見直し削減550万円、そして一番大きなものがランニングコストの削減7,850万円である。このランニングコストの削減の主なものは、まずダウンサイジングによるもの（平成16年度から始まった機器更新の際に、安くてしかも性能の良いパソコンや映像設備に変えたことによる効果）、それと職員のスキルアップによるもの（保守を委託保守から自主保守に変えたことによる効果）が大きな要因といえる。

これに対しプラス要因として、機器更新によるリース料の発生が1,700万円、歳入の減が約1千万円、計2,700万円であり、よってマイナス要因からプラス要因を差し引きして、1億2,500万円のスリム化（運営経費の削減）が達成された。

以上が当初目標数値も含めた平成19年度までの決算の流れである。

なお、資料2は、推移の明細である。

・施設の民間への一部貸し出し（資料3）

資料3は施設の一部を貸し出しすることは可能かという質問について調べたものである。資料の作成にあたっては設置10年経過後という設定で作成した。

管理運営方法は貸し出しに限定せずに、いろいろな運営方法についても可能性を調べた。特に問題としたのは、法制度上のペナルティが、例えば補助金を返還しなければならない等々が中心であり、運営上の問題点はここには入っていない。

運営方法でペナルティが無いものが表の一番左の方の線、上から下に流れるものであり、現在の目的のまま継続し、施設の管理運営方法を直営又は指定管理者制度による選択を行うものである。

この左の流れの中で、ペナルティが無い許可制の貸出し方法としては、行政財産の目的外使用許可というものがある。これはある一角を、例えばミュージアムショップなどのショップに入ってもらうとか、喫茶店に入ってもらうとか、レストランに入ってもらう。要するにフロアのある一部分だけを、行政財産の目的とは違う目的に使用するために許可をする制度で、これによればペナルティは無い。

真ん中部分の民間への貸付、民間への譲渡については、無償であればペナルティは無いが、有償であれば補助金の国庫納付であるとか地方債の償還が必要になってくる。

取り壊しをして別に活用という方法もあるが、これについては地方債の一括償還がある。

設置10年経過後においても、行政目的以外の使い方をする場合は、目的外使用許可によるもの以外は、有償で行う場合は相当分の返還が必要になる。

委員質問・回答

委員

科学館にかかる費用は、平成19年度では、5,360万円ということか。

事務局

あくまで概算だがそのとおり。

委員

科学館の方が人件費が多いのか。

事務局

マリンスタッフの比率をどうするかによって大きく変わってしまうが、その多くの部分は科学館に配置しているということで案分するとこのようになる。

委員

マリンスタッフは時給か。

事務局

時給1,020円。

委員

マリンスタッフは何人いるのか。

事務局

総勢16名。

委員

目標計画数値の質問は、設置から例えば5年後にはこのような数値にしようとか、計画した数値を知りたかったためだ。

また、当初の15万人という数字が何に基づいて作られたのかわからない。竹島水族館の数値がそれくらいではあるが。

一年目は来なかったから、じゃあその次は少なめにこうやればいいというのは、予算の立て方で計画ではない。計画というのは作ったときに何年後はこうしようというものである。何年後は2億の赤字でいいと言っているのであれば、私としては別にああそうか思うが、計画ではなく予算を作り変えて帳尻を合わせようとしている、それが累計で増えていく。会社で言うと赤字の垂れ流しをするということになるような感じがする。

計画がなかったように感じるが。

事務局

公共施設の考え方として、歳入をどのくらいに、歳出をどれくらいに見ていくのか、その差額が一般財源ということで税金を投入するというであり、当初予算を組むときにその当時15万人、委員が言われるように、直近にある水族館だとか、そういった施設の数値も参考にしていた可能性は非常に高いが、そういったもので想定する平均入場料で9千万円というものを想定したと考えられる。それで2億円の一般財源をつぎ込むというかたちをとってあったということで、数年先には黒字に持っていかとか、そういった意識は無かったかと思う。

その後、一般財源をつぎ込むお金をどうやって減らしていくか。歳入の方が当てにできない場合は歳出をカットしていく。経費の節減を図る。運営の合理化を図る。そういったかたちで行政なりに努力していった結果がこういうかたちで表れておるといことである。

従って、民間で一つの施設を運用する、黒字に持っていくという財政目標を最初から持っていなかったというのが実態であった。

委員

最初から赤字だということであれば今赤字でもおかしくないと思う。

最初から何年たっても赤字でいくのだということなら赤字だから廃止ということは思わない。そこで計画と予算というのがどうなっていたのかが聞きたかった。

委員

一覧を見る限り、バブル期に乗って、バブルがはじけて、経済成長が止まってずっと下がってきたというふうにも見受けられる。行政側の努力も見られるが、それに追い討ちをかける以上に景気の衰退とういうのが大きく関与しているのではと思う。行政のいろいろな努力というの、そこまでくると限度があるのではないか。赤字の施設が他にもまだあるというふうに聞いているが、これがたたき台、あるいは見本になっていくようであれば、何度も慎重に審議して進めていかなければならないと痛感している。

景気の度合いで左右されるということも頭に入れての審議をしていかなければいけない。行政側の予測以外の事が起こりうるということも考えられる。

事務局

行政運営をしていくときに、予算については財務当局の方で担当しているが、行政に関する経費については、国と地方と財源の問題も絡んでくるが、潤沢な地方の財源が国から投機されるというふうには考えていない。

地方交付税の配分額にしても年々減ってきている、国の方の財政も非常に厳しい、こういう状況になっていることは間違いない。それにあわせて市の行政経費の中でも、市民病院の問題であるとか、そちらの方の絡みでいろいろな税金を投入する必要もあるということも考えている。

生命の海科学館、情報ネットワークセンターの予算についても現在の額が今後も配当さ

れるかどうかということも含め、非常に厳しい状況であることは間違いないと思っている。そういったことを念頭に置きながら、この館の見直しを委員さんの意見を頂戴しながら考えていきたいと思っている。

委員

センターと科学館を一体で考えていくのか、分離して考えてこれから審議していくのかということを決めた方がいいのではないかと。一度や二度は、センターを分けたときはどうなのかとか、科学館を分けたときはどうなのかと、センターとしての必要性あるいは科学館としての必要性、あるいは科学館を廃止するか、センターも廃止するか、そういった細かく分けていかないと、議題が大きすぎるのではないかと。思う。

委員

今の委員の話に関連して、センターの中で「どうしてもこれはやめられない」という部分があると思うが、例えば講習会とかなら勝手にやめられると思うが、市役所の一部として使っているセンターの「これだけはだめ」というのを教えていただきたい。

事務局

当初のコンセプトからすると、これは科学館云々ではなく、まず情報の中核施設をつくらうということでスタートしている。その当初には科学館云々という話は全く無く、これは行政にしても教育にしても、また産業振興・支援にしても、情報化というものは今後必ず重要になってくる。その考え自体は決して間違いでなかったと思う。

その情報化の中核施設を設置するにあたって、それを使ってどんなことができるかということを見に来ていただく。パソコンと言うとアレルギーで毛嫌いしてしまう人もいますが、いや、そんな毛嫌いすることはありませんよと。どうぞパソコンをちょっとさわってみてくださいよという、そういったコンセプトを持ったものが必要であった。

それではどうしようということで、その時に蒲郡市が古くからも海に関連したまちであると、海をコンセプトにした何か博物館、科学館をつくれないうという発想があり、生命の海科学館というもので、そこでパソコン、また映像施設を使って、こんなことができると紹介することとした。

この科学館は大変小さい。しかし、パソコンを使うことで40億年前の世界を再現できる。スペースは小さいがパソコンを使うことによって、決して大きい科学館に負けないコンテンツを作ることができる、そういったコンセプトでつくられたものである。

情報推進施設があり、その次に科学館ができた。だから切り離すことができないということである。

また、どこが必要なのかということについては、情報の中核施設というのは、やはり必要だろうというふうに思っている。蒲郡市に情報ネットワークセンターがあるということは県内の市町村どこにでも知られており、情報部門の活躍は評価をいただいている。

そうではなく、1階部分の無料パソコンコーナー、あれはなくしていいのかと、そういったことであれば、やろうと思えばできないことはないと思う。情報の中核施設として今現在あるものを無くしてしまうというのはどうなのかということである。

委員

資料3で、「本来の用途・目的を妨げない範囲であれば、行政財産の目的外使用を許可することが可能」と一番下に書いてあるが、使用可能となるのはフロアのどれくらいの範囲か。

事務局

3分の1ならOKとか、そういったものではない。行政目的を妨げない範囲で。こういったレストラン云々というのは、要するに相乗効果を与える、例えば、来た人がそこにショップがあれば、より行政目的がうまく活用できると。来た人がお腹がすいたから喫茶店でもないのか、行政目的をあくまで妨げないようなことであれば、行政財産目的外使用という、これは1年ごとに許可を受けてやる、そういった方法である。何平米が云々そういった規定はない。あくまで市が本来やるべき行政目的を妨げない範囲内であればできるということである。

委員

民間への貸付で有償であれば返還するということが、その場合どのくらいの金額になるのか。

事務局

総事業費が32億円、そのうち、例えば国庫だと8億数千万円、比率でいくと約26%になるが、例えば年100万円で5年間貸出すと500万円、500万円のうちの26%は国に返す、国に借りた分のパーセント分を納付額として国に返さなければならない、ということである。県の補助金も借りているので、総事業費分の県の補助金分はおそらく県に返すことになる。

議題1 生命の海科学館について（協議）

委員長

議題1、生命の海科学館についてということで、科学館をどのように認識をしているのか、科学館についてお気づきの点、今まさにいろいろと質問を頂いたが、センターとの関わりを含めて、委員の皆さんのお考え、ご意見を頂きたい。

本日欠席された方からの意見も頂いているので、事務局の方からまず紹介する。

〔事務局が欠席委員から提出された意見を朗読〕

(意見1)

生命の海・科学館について

開館以来、展示物、その他があまり変わり映えなく、創意工夫の形跡がみられない。

「生命の海」と命名したからには「生命あるもの」、たとえば蒲郡近辺に生息している魚類を飼育展示して、子どもたちが実際に触れるコーナーを池のあたりに作るとか、もっともっと熟慮して下さい。

存続見直しについて

現在の蒲郡市の財政は公共施設とはいえ、赤字の箱物を維持する体力は残っているのか。その存続意義を市民が納得する説明ができるのか。館長以下もっと経営努力しなければ見直しも含め、より有効な活用方法を考える時期かと思います。

(意見2)

「蒲郡情報ネットワークセンター 生命の海科学館」存続賛否の件

存続に賛成します。

未来の子どもたちの教材として、夢として、是非とも蒲郡市民の宝として、心の糧として、残してやりたい。

経費の削減

毎年6千万円の赤字が計上され、市の財政逼迫のため当館の廃止・売却を考えておられる様子、侘しく、悲哀を感じます。例えば、蒲郡が他の市町村と合併したとします。そのときの市会議員の定数はおよそ現在の半数以下になります。近隣豊橋、豊川の定数を見れば明らかです。今の議員定数を10名削減すればどうでしょう、6千万円近く算出できませんか。

機材の購入等

今一度、館の財政支出を見直し、改善できるところは徹底的に抑え、これから先の機器の補充などは業者を一切排除し、比較検討し、メーカーと直接交渉し、購入する。使用済みの機材は市民に安価で売却する。

蒲郡情報ネットワークセンターのもう一つの利用方法。

これからの税務確定申告はパソコンから直接申告するe-Taxになっていきます。市税務課とタイアップし、積極的に宣伝と指導を推し進め、市の利益のために活用してもらいたい。

人事の変更について

館長は学芸員でないダメですか。定年制は規約に記載されていますか。例えば市長が兼務するとか、一般市民の中からボランティアで公募し、市で慎重審議し、選出されたいかがですか。経費削減の一部につながるかと思います。以上。

委員意見

(意見)

自然な形で人が集まる場所、そういったところが理想的だが、感じとして展示物はいつまでも変わらないものが展示されている、同じものがずっと置いてあるだけということ。それから、コンテンツの更新について、昨年もリニューアルしているようだが、できればそういったものを変えて目新しさを出していく、そういった点を考えてはどうか。一部を使ってレストランなり、オープンカフェとか、人が集まる場所、そういったものをつくっていく、それから学校関連ではいろいろ働きかける。地区としては、地域ふれあい活動に利用する。いろいろな努力を相当しないとこれは市の財政は切迫しており、許されることではない。

東港のことを一緒に考えていくことは良いことだが、少し時間がかかりすぎる。

いろいろなことを考えて、人が集まること、そういったことを掲げて、努力ができるかどうか。

情報ネットワークセンターに関しては、もともと市の必要があるということでつくったものだから、必要な額は当然マイナスになって出てきても良いと思う。どうしても必要な施設は、ある程度それは赤字でも、経費がかかっても仕方がないのではないか。

(意見)

観光の拠点として立ち上げのときに期待をされていた部分があるので、市民にも認知され、外から呼び込む一つの施設としてどうかしてはという思いがある。

また、変遷の中で教育の活用ということがあり、南極と子どもたちが交信をしたという、そういった未来の子どもたちがそういう体験をできる、新たな感動を覚えるような活用がされていけばいいと思う。

情報という部分の中で、今後もっと活用を考えていければと思う。ここが情報の拠点ということで活用できる方向にいけたらと思う。

(意見)

科学館のコンセプトが良く理解できていなかったが、情報の中核施設という位置付けであれば理解しやすい。情報の中核施設として考えれば、市の仕事の一部であり、当然経費として扱えるようなものもあり、赤字というのはどうかという部分がある。

しかし、科学館については、情報の露出というか、外から見ても何をやっているのかが見えるという意味で科学館が選ばれたとすれば、これはコンテンツを差替えてもいいということになる。

科学館の方が先にありきと感じていたが、もし情報施設の方が、中核施設の方が先にあり、そのスキルを利用して、そういうもののコンテンツとして、科学館が選ばれたとい

うことであれば、リピーターを増やすためには、何回か来ると違うものが見えるというよう
な、そういう使い方が十分あるのではと思う。

コンテンツの紹介に必要なものは必要な経費として計算をし、見た目上は赤字かもしれ
ないが、これは必要経費なのだという部分と、市の財政も厳しいので、お金が取れるよう
なそういうものを置かなければいけないということで科学館があるのであれば、それはそ
れで、そういうつもりで次の利用法を考えればいいと思う。

(質問)

委員長

事務局、情報の中核施設ということで、コンテンツを差替えても良いかという点につい
てはどうか。

(回答)

事務局

大学の研究者の方々、生徒の方々とタイアップして、コンテンツをそういった発表の場
にする。最新の研究をされている先生方の、先端技術の発表のフィールド、実験的な段階
なものの発表フィールドとしてというご意見を前回いただいた。非常に嬉しいご意見と考
えている。しかし、税金を投入してコンテンツを作るということになると多額のお金がか
かる、少しの手直して非常に大きなお金がかかってしまう。そういったことが許されるか
という、今の財政上ではなかなか許されないということではなかなか新しいコンテンツを
入れ難い、触れる地球というのを平成16年に入れたが、あれもなかなか苦労したという
経過がある。

最新のコンテンツを入れていけば集客には繋がるが、それも市民の方は無料であるため
金額には跳ね返らない、跳ね返らないそういったものを作って果たして市民の理解が得ら
れるかというところはどうしても難しいところがある。

(意見)

公共性と赤字の問題を考える必要がある。決して皆が反対だからといって多数決で決め
る問題ではないなと思う。

また、科学館だけを指定管理としても、多くても5万人以上は来ない。3千万円の収入
ではどこもやらないだろう。竹島水族館、博物館、海賓館マリンセンターハウス、生命の
海科学館、海辺の文学記念館をトータル的に考えていかないといけない。1館だけで引き
受けるとするのは、はっきり言って誰がやっても営業は成り立たない。ただし全部一緒に
考えるということであれば、やる事業者があるかも分からない。

東港も含めてどうするかということ全体的に捉えないと、一個一個やっていくと、そ
の都度継ぎ接ぎだらけになるというような感じがする。

今蒲郡市には、年間800万人の観光客が来ている、そのうち300万人はラグーナだ

が、人口はたった8万人なのに800万人のビジターがいるということで、もっと5館を含めて、東港も含めて利用しやすいようにする必要がある。

トータル的に考えていかないと、観光地が減るといのは深刻な問題だなど。トータル的に海辺を考える、一個だけだったら誰がやってもやりきれないと思う。

(意見)

迷いをメモしてきたので、そのメモにより話をしたい。

生命の海科学館の存続のために考えると、コンテンツの更新ができているのか、あるいは毎回企画が新しい企画をやっていけるのか、というのが1つの疑問点である。

コンテンツの中味を入れ替える。化石の入れ替えはストックがないと入れ替えができない、ストックはあるのか。ソフトの入れ替えはできるのか、更新をしていかないと、なかなか新しい人ってというのは集客できないのではないかと。企画というのは毎回やっていかないとなかなか参加してもらえない。

たまたまナイトミュージアムというのがあって参加したが、学芸員がやめられるということで、10回のところが2回で終わってしまった。学芸員がいなくなったあとは後任を採用していくのか、経費の問題でしないのか、これからどうしていくのか。

地元の学校が授業等に利用しているのか。現実には化石、あの時代というのは必ず授業に出てくるものだから、そういう意味で利用しているのか。理科の先生方に企画から参加してもらうという事はできないだろうか。利用してもらうことはできないだろうか。

南極教室のビデオを見たが、とても面白かった。ああいった企画ができるなら使えばいい。

化石については当初から大変で、裁判あるいは大変ダークなイメージがあったが、仮にそうだとすると高いものをつかまされたということについては、どうしようもないことだが、化石自体についてはニュートンなどの科学雑誌に最近でも載っている。それで学術的には評価されているのだなと思った。もしも売るのがだったらいくらで売れるのか。

もしも廃止をされるとしたら、案みたいなものはない。貸しホールみたいに使うのか、美術館にするのか。図書館という話があるが、それなら科学館はそのままあったほうが良い。科学館も子どもたちが虫眼鏡を使って見てみたり、親子で来てみたり、いろんな意味で使われている。

市民として外から見ると1階の情報ネットワークセンターのイメージの方が強い。「1階は何やっているのだろう、入りにくいよね」皆に言われてしまう。科学館のプログラムもあるが、そこにはいなくて、皆インターネットの利用をしている。中国の方の利用も多いと聞いている。そう考えると1階部分の利用方法を先に考えたほうが良いのではと感じる。

1階の利用を何にしたら良いか、これもアイデアはないが東港の開発が進むとするならば総合観光センターかなと思う。観光案内所みたいにベビーカーや自転車など貸出し。手機場、三河木綿のショップや、あるいは喫茶、レストランも良いかもしれない。全部入れ

ていけるかどうか分からないが、東港の中でランドデザインの中で考えていかないといけない。そういう意味では改良、努力みたいなことで時間稼ぎする手もあるのかなと思う。

委員長

内容の広い深い話を頂いたが、今日この場で一つずつ審議していくというわけにはかないので、ご意見を頂戴しておくということにさせていただきたい。

(意見)

存続するにはどうしたら良いか、あるいは廃止するにはどうしたら良いかということである。いろいろ私の心の中も存続の気持ちが強いわけだが、つくった経緯というものを踏まえると、廃止をするにもどういう形が良いのかということを考えないといけない。それから市のほうも財政の赤字がどのくらいまで耐えられてこの施設の必要性を感じるのか。そういった面をいろいろと考えてみたが、やはり市はこういう目的でつくったのだから、これは赤字でも存続するというバックアップしていく意見があれば存続することが一番良い。

しかし、どうみても体力的にこの赤字を埋めて存続するというのは不可能ではないかと思う。また、委員長が先回の会議で最終的に意見を述べられた「市は赤字のところは見直しをするのだ」には、同感はできないけれど考えさせられた一面があった。

水族館を赤字だから廃止するという意見がこれからあるかもしれない、あるいはこの化石を水族館に併設してもっていくという考え方もあるかもしれないが、いずれにしても赤字の施設にどれだけ市が耐えうるかということによって、存続をしたい気持ちはあるけれど廃止もやむをえないなと考えている。

(意見)

建物も素敵で中にあるものも本物、海も見える。とても良い条件であるのに市民の方々がこの科学館を受け入れようとしないのが現状。良くない噂、悪いイメージのために市民の多くが科学館に近づかないように感じられる。

市が赤字だからと言って、科学館を見るのが嫌というほど深刻になっているとも思わない。化石の裁判も終わりもっとすっきりしていいはずである。ではその原因は何だろうかと考え、もしかしたら赤字とか裁判とかが問題ではなく、もっと違う何か、市民の皆さんがなんとなく感じている何か良くないイメージがこの科学館の中にあるのではないかと思う。

これが疑惑か、あれが...という市民の不信感の元となるものを一度きれいしたほうが良い。

蒲郡市民に「わがまちには科学館あり」と言ってもらえるように、すっきりとした形にしていくことが必要である。

(意見)

赤字、赤字と言われるが、蒲郡市民は無料である。市内の学校の子供たちにPRして学校の授業などで団体入場の人数が増えても収入は増えない。裁判も決着し、さあこれからだというときに蒲郡市の財政も逼迫してしまった。新しい企画を起こすには当然お金がかかる。一般的に学芸員の世界では、全国の科学・博物館の常設展は10年で更新というのがだいたいの目安となっている。生命の海科学館は、今展示している、公開しているものだけで精一杯で他に展示可能なものは収蔵していない。これは、学問的に価値のあるものを先取りしたら話題になっていることをコンピュータで紹介していきこう、情報として、コンテンツとしてそれを増やしていきこうというオープン当初のコンセプトによるものである。

確かにPRが下手であったと感じている。一例を挙げると生命の海科学館の英文のサイトがなかった。少し英文化したものがあつたが、日本人が作った英文で英語圏の人には通じないものであつた。その反省の下、現在、ネイティブのいわゆる英語圏の人に全部何回も校正してもらってそれで準備しているところである。

また、1階のインターネットを蒲郡市内で就職して働いておられる中国の方が利用しているが、その方たちと帰られる時に玄関で話をした。この施設が、科学館といわれるものを展示していることを全然知らなかった。ここはインターネット専門施設じゃないかという理解であつた。

これから、全国に向けて、あるいは海外に向けてどんどんPRして、はたしてそれでどうなるかということであるが、2、3年前から常に考えているのだが、思い切った構想で、頭の中にはいくつかの構想をもっているが、構想を実現するためには少しずつお金がかかって、それを思い切ることができない。

展示物は裁判でいろいろと疑惑とか問題になったが、誰がみても、どんな専門家、どんなマニアの方が見ても、展示物、数は少ないが日本で一流の展示物と自負している。また、どの外国人からもすばらしいと。しかし来館される人数が少ない。それにはどうしたらよいかということこれから真剣に考えていかなければいけないと思っている。

お金をかける施設なのか、ここは何のためにつくったか、蒲郡市にはこのような施設があるという存在感を示す、それをはっきり方針としてこれから謳っていかなければ、どんな経営のベテランが来ても、私個人的にはこれで黒字化するのは無理だと感じている。

全国のどんな大きなミュージアム、日本の博物館、美術館でも黒字になっているところはないと思う。これは海外でも同じ。要するに、儲けるための施設なのか、存在感を示す、蒲郡にはこれがあるのだという施設なのか、それを見極めた上で今後の方針を見直す、廃止になるかどうか分からないが、そういう目的意識、それをはっきりとしていかなければいけないと思う。

これから協議の中で、一つ一つ私の考え、私の経験等をご紹介、あるいは皆様のご質問等にも答えていきたいと思うが、是非見直しをしてなんとかというふうに考えている。

(意見)

前回とほぼ同じような考えを述べるが、まちの顔がほしいというふうに思っている。蒲

郡の顔はやはり海、これが最大の財産であり、その拠点がほしいと思う。東の地区ではラグーナ蒲郡、西浦温泉を中心とした西浦半島。もう一つは、表玄関である蒲郡駅からシンボルである竹島、これを結ぶ中心部のエリア。情報ネットワークセンター・生命の海科学館というのは、一つは蒲郡市が情報化推進をするためのネットワーク施設という意味合いもあるが、生命の海科学館については、生命の源である海をテーマにし、海のまちづくりを進めている蒲郡としても売り物の一つなるかもしれないと思っている。今まで情報のショールームということが強く出てきたが、今後、学校等と連携して教育生涯学習施設としての役割が大変大きなものになると思う。

子供たちがここに来て科学に興味をもったとか、そういう話もかなり聞いており、結果と次第によってはこの施設がかなり活かせるのではないかというふうに思っている。この中のものを分かりやすく説明する、そういう体制作りというのにも必要だろうと思う。

学校との連携、専門にする学芸員とか、あるいは観光に関して言えば修学旅行、観光協会も力を入れているようだが、いろいろな展開の仕方があると思う。

せっかく多額の資金を投入して建設した施設。壊すのは簡単だが、もう一度チャレンジの機会を与えてもいいのではないかと思っている。

議題2 施設の存続見直し又は廃止について（協議）

委員長

皆さん方から幅広いお考えやご意見をいただいたが、議題1はとりあえずこの程度にさせていただき議題の2に移りたい。ただいまのご意見を踏まえ、この科学館の施設を存続するのか廃止するのかということについて、理由を簡単に述べていただき、考えをお伺いしたい。

委員意見

（意見）

私の考えとしては、見直しをしながら存続をしていくという、そういう思いでいる。廃止論については、前回の市長選のとき争点の一つというかそういうものにも挙げられたりしたという経緯もあるが、私が思うに、やはり市の施設のほとんどが赤字施設、民間の考え方でいえば、ほとんどが赤字だという施設である。そういった中で、やはり根本的には利用者が少なくなっているという、それをいかに見直して今後利用していただくのが大事な点であると思う。それで、議論となった、特に赤字がどこまで許されるのかということについてはなかなか難しい問題ではあるが、一つの参考として、市の施設がどういう損益、歳入歳出の結果になっているのかということを見ることができれば、その中から一つの考え方として優先順位も含めて考えられるのではないかと思う。その資料をお願いした

い。

(意見)

難しいことだが、どのくらい赤字が出てもいいかという位置づけをまずはっきりさせることと、いろいろとご意見があるが、存続を前提に計画を立て、最終的にダメなら廃止ということになるのではないかと。具体的に案がなく、存続だ、廃止だといってもなかなか結論が出にくいと思うし、計画を立てるのは大変だが、やはりよい計画が出来れば存続で、どうしてもだめだったら廃止ということではないだろうか。

(意見)

トータルの中で見直しをしてどうするかということである。観光で宿泊を2割増やすにはどうするかということについて、私は修学旅行に期待している。蒲郡には修学旅行はほとんど来ていないが、修学旅行での宿泊は、1部屋当たりの収入が多く、観光のオフ期に利用してもらえる。しかし、竹島があるとか、水族館があるということだけでは修学旅行先に選んでももらえない。学校側の見学地の条件は様々な条件があり、それがないと修学旅行は来ない。そうした中で、生命の海科学館は、観光客を増やす立場でいくと是非存続してほしいと思っているが、それひとつだけあったとしてもここだけでは来ることはない。トータル的に見直しをして存続かどうかということにしたい。

(意見)

ナイトミュージアムの話をしたが、参加している子どもがクイズの答えを良く知っていた。理科に親しむ子供たち、一時はそういう時期もあるわけだから、誰かがリピーターになるかは別にして、それに触れさせるという意味では良い施設と思う。しかし、やはり存続するためには納得できる存続プランの提示がないと、委員会の多数決で決まりましただけでは納得しないと思う。一番大きな問題は、市民に愛されていないというのが致命傷である。イメージを変えていくのは大変なことだと思うが、いずれにせよ存続するならできる限り存続をとと思う。

(意見)

存続意見でずっときているが、赤字に対してどれだけ理解ができて行政の方がどれだけのことができるかということ。ずっと続けても赤字部分は変わらない、景気が回復しようがしまいが、こういった施設は黒字経営になるということはあると思う。

赤字に対してどれだけ行政の方がお金を出せるのか、出してもいいのか、という問題に尽きると思う。出せるということになれば、存続をベースにして考えて議論していけばよい。しかし、完全に出せないと、存続のお金はないのだと、行政が赤字なのだから赤字の施設は皆廃止の方向でいくという強い姿勢であれば、もうこれは議論を戦わすだけのことはできない。出すものがでなかったら、そのときには、この施設をどのようにするか、転

売するのか、あるいは分けて、水族館と施設をあわせてそちらで黒字に近く持って行くのか、そういう考えしかできない。市がどれだけ赤字に対してお金が出せるのか。損得と赤字がどういうふうにつながられるのかということで、これからの議論を進めていく必要があると思う。

（意見）

私は、存続していただきたいと思っている。真剣にここを残したいと思う人はたくさんいると思う。赤字だからいらないと言っているといっても、あったほうがいいという人がいないわけではない。給料をもらっているから考えると、仕事に携わっているから考えるでは、新しいものは出ない。本当に残したいと思う人を募って真剣に考えなければならぬ。中にいる人のためではなく、「来てくれる人が喜ぶ科学館にしよう」という気持ちで一生懸命考えれば、もっと素敵なアイデアがでるのではないかな。

今は、一生懸命村おこしをしているところが多い。私たちもこれを見習いたい。蒲郡の人は、あっちも赤字こっちも赤字で赤字のことばかりを話題にしているが、まず、科学館を何とかしてみようという気持ちが必要であると思う。お金をかけてどうこうというのはなく、アイデアのある人、一生懸命な人など、みんなの力を借りて今の時代にあった市民が誇りを持てるもっと先を見た科学館にしてほしいと思う。

（意見）

一つはいかにして赤字を少なくしていくかということで、1階でも部分的に使われてそれで収益も上がるのなら、少しでも赤字が減っていくのではと考えたが、いろいろと制約があって厳しいなという感じが少ししてきている。しかし、子供たちのためにも非常にいい施設とは考えている。だからもう少し、関係者、学校関係とか観光業者とかもう一度お誘いして、皆さんで知恵を出して、やはりここが入りにくいような感じであるから、もう少し愛されるように、自然に足を運んでくる施設にもう少し時間をかけて考えれば、少し脈もあるかなとそういう気がする。結論を少し待った方がいいのではないかな。

（意見）

存続か廃止かと言ったら、当然存続させてくださいということになる。しかし、先ほどからご意見をいただいたとおり、マンネリ化した同じような存続ではなく、大幅な見直しをしないといけないと思う。余談になるが、私は、現在十数名いるマリンスタッフの研修等で、どんなお客さんでも当館におみえになったお客さんには必ず「お土産」をもって帰ってもらいなさいと、そういう話をしている。お土産というのは、どんなことでもいいからここに来てよかったと、科学館にどんな目的で来ていただいたお客さんでもいいから、この玄関に入ったお客さんには、来てよかったという印象を与えるように努力をなささいということである。私は、それがモットーだと思っている。

是非存続させていただきたい。

(意見)

私も存続に向けて、どんなプランができるのかということを一度やってみたいと思う。赤字とかそういういろいろな考え方があると思うが、ここが本当に収益施設かどうかといところを議論していただきたい。赤字云々であれば図書館は赤字ということになってしまうし、博物館だってそうである。ほとんどの蒲郡の施設がなくなってしまう。それでいいのかどうかということがあるかと思う。蒲郡として何を残すのかということを一度考えないといけない。私は蒲郡の顔づくりとしての中核施設としてこれが必要だと考えている。市民の声を知りたいと思う。

委員長

皆さんから大変貴重なご意見をお伺いした。本日は欠席をされている委員もいらっしゃるので、次回、もう一度議題として上げさせていただき、存続見直し又は廃止ということについて、方向付けを次回にしていきたいというふうに考えている。そののちの運営等については、その後に協議を進めてまいりたい。

議題3 その他

〔日程調整 調整の結果、9月2日(火)もしくは9月3日(水)の午後で欠席委員に確認し、案内の通知を行う〕

[閉会 午後7時58分]